



市内小中学校のICT教育 ～GIGAスクール構想の実現を目指して～

ICTは、Information and Communication Technologyの略語で、情報通信技術を意味します。ICT教育とは、情報通信技術を学校での授業などに活用する取り組みを指します。

これからの情報化社会を生きていく子どもたちのため、ICT教育の充実を図り、ICT機器を活用した教育活動に取り組んでいます。

ICT機器を活用した学習活動

市では文部科学省の「GIGAスクール構想」に基づき、小・中学校で1人1台のタブレット端末と、高速大容量の通信ネットワークの整備を行いました。これまでの学習活動にICT機器を効果的に取り入れることで、学習活動の一層の充実と、授業改善に取り組んでいます。タブレット端末の効果的な活用方法はまだ試行錯誤の状態ですが、積極的に使うことで、子どもたちも徐々に使い方に慣れてきています。

小学校や中学校、学年によっても利活用の頻度は違います。学習用具の一つとして、子どもたちの発達段階や学習に必要なタイミングを考えながら活用しています。また英語学習では、指導者用デジタル教科書を大型提示装置に映し出して学習しています。

ICT支援員の導入

ICT機器を活用した学習活動をスムーズに行うには、サポートが必要です。市ではICT支援員を各学校に巡回派遣し、タブレット端末を利用した学習活動のサポートをしています。

また、ICT支援員を講師とした教員向けの研修を実施し、教員がタブレット端末の利用方法を理解することで、効果的な活用の検討ができるようになりました。

家庭でのタブレット端末の活用

タブレット端末を家庭に持ち帰って活用する取り組みも始めています。インターネットに接続できない環境でも利用できる教材ソフトがあるので、一人一人の家庭環境に対応した学習が可能です。

家庭でインターネットに接続できる環境があれば、調べ学習を行ったり、教材ソフトの課題を自由に選択したり、クラウド上に保存した自分のデータを活用したりすることもできます。学校と同等の学習ができるだけでなく、感染症などにより長期の休業になったときにはオンライン授業を受けることもできます。

今後は学校と家庭が連携しながら、子どもたちの学力向上のためにICT機器を効果的に活用していきます。



あさひ輝いた人々

第39回

不屈の人生、 書道芸術に貢献

ふるはし しげお ひざん
古橋 重雄〔飛山〕
(1910～2004年)

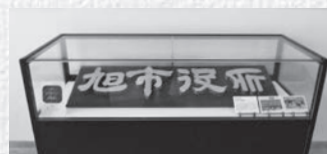


古橋重雄は飛山と号し、書道家として活躍した人物です。明治43(1910)年、古城村の酒造業の長男として生まれました。小学校のころから優秀でしたが、家業が倒産したため入学したばかりの匝瑳中学校を退学せざるを得ませんでした。しかし、勉強への情熱が捨て切れず、東京の伯父を頼りに名門麻布中学校の夜間部に通います。麻布中の精神は人生の大きな指針となり「何れも逆境、何養という連中、転校してよかった。心の中に鉄棒が入った様だ」と、自らの手記で振り返っています。伯父の事業の失敗で卒業できませんでしたが、故郷に戻ってからは農業をしながら独学で教員を目指して勉強を続けました。何度も試験を受け、昭和4(1929)年によりやく教員免許

を取得し、20歳のときに晴れて小学校の教員として仕事を始めました。その後さらに勉強を続け、昭和14(1939)年には中等教員漢文科の免許も取得しました。

戦時中は満州国安東師範学校に転勤したため、家族と共に移住しますが、ここで敗戦を迎えます。捕虜としてシベリアに送られ、厳しい抑留体験をしました。ここでも麻布中の不屈の精神に支えられ、なんとか生き延びて帰国し、その後再び教員としての生活を取り戻しました。

学校では書道の指導に当たる傍ら、自らも書道に励み、昭和33(1958)年、第11回書道芸術院展から5回連続して賞を取るなど、書道で活躍しました。昭和38(1963)年からは審査会員、昭和42(1967)年からは理事となり、昭和63(1988)年からは顧問を務めました。40数年にわたる教員生活の後には、一書人として活動する道を選び、多くの門下生を育てて書道の発展に力を尽くしました。おごり高ぶることなく温厚で、誰にでも平等に優しく指導したといえます。また、多くの作品を学校に贈り、今も市内の小中学校で見ることができます。



飛山書の旧市役所庁舎銘板
※3月まで市役所で展示しています。